

- 第11回 英語プレゼンテーションと通訳演習
- 第12回 英語プレゼンテーションと通訳演習
- 第13回 英語プレゼンテーションと通訳演習
- 第14回 Review
- 第15回 まとめ

●評価方法

英語による自己紹介スピーチ資料作成 10%、自己紹介スピーチの通訳 10%
 英語パワーポイント資料作成10%
 英語プレゼンテーション 20%
 英語プレゼンテーションのスピーチ通訳 30%
 通訳講義のまとめレポート 20%

●受講生へのコメント

各自、①英語での自己紹介スピーチ（2分以内）（A4ダブルスペースでタイプしたもの1枚）および②パワーポイントを用いたスピーチ（5分程度）を準備すること。内容は時事問題、サークル活動、故郷の紹介、将来の職業などクラスの皆に興味をもって聞いてもらえると思うテーマであれば、何でも自由。発表時には、パワーポイントにできるだけ、写真、地図などを用いてわかりやすくすること。これら2種類の英語スピーチを講義初日に提出してもらい、通訳実践で用いる。講師への提出用、通訳者への提出用、自分の発表用として同一物を3部用意しておくこと。③また、通訳についての文献を1冊読んで、通訳技術について理解したことをレポート1枚にまとめて講義2日目に提出すること。

●参考文献・教材

プリント資料を配付。また、上記スピーチを教材資料とする。

各自が興味をもった通訳に関する参考文献（講義3日目に提出するレポート用）1点。例）ローデリック ジョーンズ（Roderick Jones）著、ウィンター 良子・松縄 順子訳、『会議通訳』松柏社（2006/04）

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
245	文化理論 Culture Theory	後木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名	担当教員名 海老根 剛 准教授		

●科目の主題

表現文化コースで学ぶ学生を対象に、文化の考察に不可欠な基本的視点と理論を概説します。表現文化コースは本質的に学際的であり、そこで扱われる対象も多様です。したがって、個別的な主題の多様性のなかにコースの全体像が見失われてしまいがちです。この講義では、表現文化コースが前提する「文化」についての基本的な考え方をいくつかの観点から解説します。

●到達目標

文化の概念の歴史的変容を確認し、文化を考える基本的視点を獲得する。

●授業内容・授業計画

今回の講義では、まず文化という次元の人類学的起源を確認したあと、文化概念の歴史を概観します。その後、近代社会と、後期近代とも呼ばれる現代社会における文化のありようを、それを分析対象とする代表的理論とともに解説します。さらに授業の最後では、創作に関わる諸理論を参照して、創造行為の意味合いが19世紀から現在までどのように変化してきたのかを概観する予定。

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 文化と進化：生物学的進化と文化的進化
- 第3回 文化と進化：言語と技術の発生
- 第4回 文化と進化：イメージ制作の始まり
- 第5回 文化概念の歴史的起源
- 第6回 近代社会の文化概念
- 第7回 現在社会の文化概念
- 第8回 近代社会と文化（1）
- 第9回 近代社会と文化（2）
- 第10回 近代社会と文化（3）
- 第11回 グローバル化と文化（1）
- 第12回 グローバル化と文化（2）

第13回 創作行為をめぐって(1)

第14回 創作行為をめぐって(2)

第15回 まとめ

●評価方法

授業期間中に課す複数回のレポートによる。また、レポートの代わりに発表の機会を与えることもあり得る。

●受講生へのコメント

表現文化コース二回生は必ず受講すること。

教室の関係上、履修希望者多数の場合には、表現文化コースの学生を優先したうえで受講制限を行うことがある。

●参考文献・教材

文献などは随時紹介する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
246	表現文化論 Lecture in Art and Representation	前月4	2単位	2～3年
	旧科目名 表象文化論 I	担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

都市とそこに住まう人々を扱った「都市文学」は無数にある。そのなかで、都市大阪と大阪人はどのように表象されてきたのか。都市文学に占めるその特異性と普遍性は何か。おもに大正以後の東京および大阪出身のそれぞれの作家の作品を取上げて検証する。

●到達目標

都市を扱った文学作品を考察する方法および視点を獲得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

都市文学の基本的特徴を理解したのち、おもに大正以後のさまざまな作家の作品を読む。

第1回 イン트로ダクション

第2回 都市文学の基本的特徴について①

第3回 都市文学の基本的特徴について②

第4回 都市文学の基本的特徴について③

第5回 東京人のみた大阪①

第6回 東京人のみた大阪②

第7回 東京人のみた大阪③

第8回 東京人のみた大阪④

第9回 大阪人のみた大阪①

第10回 大阪人のみた大阪②

第11回 大阪人のみた大阪③

第12回 大阪人のみた大阪④

第13回 関連資料および論文を読む

第14回 レポート作成のために

第15回 総括

●評価方法

出席、発表(コメント)、レポートから総合的に判断する。

●受講生へのコメント

積極的な参加が求められる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載No. 247	授業科目名 表象文化論 Lecture in Culture and Representation	開講期 後水 4	単位数 2 単位	標準履修年次 2・3 年
	旧科目名 表象文化論 II	担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

『スター・ウォーズ』はアメリカ映画における金字塔的作品であるだけでなく、映画論、物語論、ポストコロニアル理論、文化産業論、映画と社会の相関関係など様々な観点から読み解くことのできる、優れたテキストである。『スター・ウォーズ』を素材として、具体的に上記の諸理論について理解を深めていく。

●到達目標

『スター・ウォーズ』という映像作品をテキストとして、物語分析、映像分析の手法を学ぶ。表現文化コースにおいて学んでいくために必要な現代の文化理論（ポストコロニアル理論、受容理論、文化産業論）についての基礎的知識を獲得する。さらに先行研究を踏まえた論文を書くスキルを習得する。

●授業内容・授業計画

『スター・ウォーズ』6部作の映像を鑑賞し、関連作品および作品分析について必要な諸理論を紹介し、物語分析・映像分析の方法について講じる。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 『スター・ウォーズ』作品紹介(1)
- 第3回 『スター・ウォーズ』作品紹介(2)
- 第4回 『スター・ウォーズ』作品紹介(3)
- 第5回 物語論から見る『スター・ウォーズ』の構造
- 第6回 アメリカ映画史における『スター・ウォーズ』
- 第7回 映画ジャンルとしての『スター・ウォーズ』
- 第8回 関連作品の紹介
- 第9回 『スター・ウォーズ』と日本映画
- 第10回 アメリカの現代史と『スター・ウォーズ』
- 第11回 『スター・ウォーズ』作品紹介(4)
- 第12回 ポスト・コロニアル理論から見る『スター・ウォーズ』
- 第13回 メディア・ミックス、インターネットと『スター・ウォーズ』
- 第14回 『スター・ウォーズ』作品紹介(5)
- 第15回 レポートの書き方と総括

●評価方法

学期末レポートおよび平常点（授業時のコメント）で評価する。

●受講生へのコメント

受講生は、必ず『スター・ウォーズ』6部作を事前に見ておくこと。

●参考文献・教材

授業中適宜指示する。

掲載No. 248	授業科目名 比較表現論 Lecture in Comparative Representation	開講期 前火 3	単位数 2 単位	標準履修年次 2～4 年
	旧科目名 比較表現論 I	担当教員名 小田中 章浩 教授		

●科目の主題

フィクションの中の記憶喪失

●到達目標

記憶喪失というモチーフは小説、演劇、映画、さらにマンガやゲームといった表現ジャンルにおいて、今日ではありふれたものとなっている。このモチーフの表現形態は、ジャンルによってどのように異なるのか、あるいはそこに共通する要素とは何か。こうした問題について検討することにより、特定の表現ジャンルにこだわらない表象文化論的なりサーチについて理解を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

記憶喪失がフィクションの世界に登場するのは比較的最近のことであり、それは人間の心や記憶のあり方が明らか

になったことと関係している。モチーフが登場した歴史的な背景を辿りながら、各時代において記憶喪失を扱った代表的な作品と、その背景にある問題について考察する。

- 第1回 イン트로ダクション：人間の記憶とは何か、記憶を失うとはどのような状態を言うのか
- 第2回 モチーフの登場(1)：19世紀の小説作品から
- 第3回 モチーフの登場(2)：二重人格（解離性人格障害）との関係
- 第4回 モチーフの登場(3)：神話や伝説の世界との関係
- 第5回 モチーフの発展(1)：転機としての第一次世界大戦
- 第6回 モチーフの発展(2)：大衆文学における展開
- 第7回 モチーフの発展(3)：繰り返される戦争とモチーフ
- 第8回 モチーフの発展(4)：サイコスリラーと精神分析
- 第9回 現代におけるモチーフ(1)：P・K・ディックの衝撃
- 第10回 現代におけるモチーフ(2)：洗脳の恐怖とモチーフ
- 第11回 現代におけるモチーフ(3)：ゲーム化する映画
- 第12回 現代におけるモチーフ(4)：日本における展開
- 第13回 機能的考察(1)：リプレイと放浪
- 第14回 機能的考察(2)：アナザーワールド
- 第15回 機能的考察(3)：生の親密さと記憶

●評価方法

評価は毎回の授業で提出してもらうコミュニケーション・シートでの授業の理解度、ならびに学期末のレポートによって行う。レポートでは講義で扱われたさまざまな視点や問題を応用する力を試してもらう。

●受講生へのコメント

歴史的な経緯を整理したり、理論的な問題を検討するために教科書を用いる。ただしそれ以外に視聴覚資料を用いたりプリントを配布するので、理論と感性の両面からさまざまな問題について考えることになる。

●参考文献・教材

教科書 小田中章浩『フィクションの中の記憶喪失』世界思想社、2013年

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
249	文化理論基礎演習 a	後月 4	2 単位	2 年
	Basic Seminar in Culture Theory a			
	旧科目名 表現文化基礎演習 I a	担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

英文テキストを精読することにより、写真や広告を読解するさいの基本的概念や視点を身につける。今回は、「写真と人体」「写真と消費文化」というテーマについて書かれた章を読む。

●到達目標

上記の概念や視点を応用してレポートを作成することにより、他人を説得でき、かつ自分で何らかの発見をしたと認識できることを目標とする。

●授業内容・授業計画

テキストを演習形式で読みすすめる。

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 テキスト① Chapter 1～10 ページ
- 第3回 テキスト① Chapter 11～20 ページ
- 第4回 テキスト① Chapter 21～30 ページ
- 第5回 テキスト① Chapter 31～40 ページ
- 第6回 テキスト① Chapter 41～50 ページ
- 第7回 テキスト② Chapter 1～10 ページ
- 第8回 テキスト② Chapter 11～20 ページ
- 第9回 テキスト② Chapter 21～30 ページ
- 第10回 テキスト② Chapter 31～40 ページ
- 第11回 テキスト② Chapter 41～50 ページ
- 第12回 テキスト③ Chapter 前半
- 第13回 テキスト③ Chapter 後半
- 第14回 レポート作成のために

第15回 総括

●評価方法

出席、発表、レポート、試験を総合的に判断する。

●受講生へのコメント

授業への積極的な参加と十分な予習が必要。

●参考文献・教材

Photography: A Critical Introduction, Fourth edition, ed. Liz Wells (Routledge, 2009). プリントを配布する。参考文献は適宜授業中に指示する。

掲載No. 250	授業科目名 文化理論基礎演習 b Basic Seminar in Culture Theory b	開講期 後水 2	単位数 2 単位	標準履修年次 2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習 I b	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●科目の主題

表現文化コースでは、文学や美術などの芸術作品だけでなく、テレビ、映画、雑誌、広告など日常的に接する身近な「ポピュラー文化」をも研究対象とする。こうした対象を研究するための理論、方法論の基礎を学ぶ。

●到達目標

理論的文献の講読を通して、まとまった論考の内容を的確に要約報告するスキルを習得するとともに、学んだ概念と方法を用いて、身近な文化現象について分析し、短いレポートにまとめることができるようにする。合わせて、英語の専門書を読みこなす英語力の基礎を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

文化理論に関する入門的文献(英語および日本語)を講読する。担当者がレジюмеを作成したうえで内容を報告し、質疑応答により理解を深める。学期末には各自で興味のある題材について分析、発表を行い、レポートにまとめる。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第3回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第4回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第5回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第6回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第7回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第8回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第9回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第10回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第11回 英語、日本語文献の講読、内容報告
- 第12回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第13回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第14回 各自で選んだ題材についての分析発表
- 第15回 まとめ

●評価方法

平常点 50%、期末レポート 50%で評価する。

●受講生へのコメント

英語テキストは入門書であるが、十分な予習を必要とする。また、授業でのディスカッション等への積極的な参加を求める。なお、受講生は原則的に表現文化コース所属の学生に限る。

●参考文献・教材

日本語文献については未定。英語文献は John Storey, *Cultural Studies and the Study of Popular Culture* からの抜粋をプリント配布する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
251	表現・表象文化論基礎演習 a Basic Seminar in Culture and Representation a	前火 4	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅱ a	担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

作品分析の基礎を学ぶ。最初に特定の方法論や理論を学んだうえでそれを作品に適用するのではなく、そのような方法論・理論にもとづく分析の一手手前にとどまり、具体的な対象としてある作品と向き合い、それを構成している表現の特徴や構造に即して考察するレッスンを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉（小説）、描かれた線と記号（マンガ）、化学的・電子的に定着された光学的な像（写真）、俳優の身体と声（演劇）、明滅する映像の連なり（映画）として与えられている。この授業では、そのような物質的なまとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにし、それを言葉によって記述するレッスンを行う。また、文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表を行うレッスンを実施する。

●到達目標

作品から感じたことを手がかりにして作品表現について考察し論理的な文章にまとめる基礎的スキルの習得をめざす。

●授業内容・授業計画

小説、エッセイ、写真、マンガ、演劇、映画について、それぞれの表現形式の基本的特徴を学び、作品分析を執筆する。また学期末には各自、選んだテーマで発表を行う。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 小説分析（1）
- 第3回 小説分析（2）
- 第4回 マンガ分析
- 第5回 演劇分析（1）
- 第6回 演劇分析（2）
- 第7回 ミュージカル分析（1）
- 第8回 ミュージカル分析（2）
- 第9回 写真分析
- 第10回 映画分析（1）
- 第11回 映画分析（2）
- 第12回 発表の方法と技術
- 第13回 口頭発表（1）
- 第14回 口頭発表（2）
- 第15回 まとめ

●評価方法

6回提出するレポートと口頭発表による。

●受講生へのコメント

この授業は表現文化コース2回生を対象とした授業です。表現文化コースの2回生は必ず履修すること。他コースの学生は受講できません。

●参考文献・教材

コピーを配布。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
252	表現・表象文化論基礎演習 b Basic Seminar in Culture and Representation b	前水 2	2 単位	2 年
	旧科目名 表現文化基礎演習Ⅱ b	担当教員名 海老根 剛 教授		

●科目の主題

作品分析の基礎を学ぶ。最初に特定の方法論や理論を学んだうえでそれを作品に適用するのではなく、そのような方法論・理論にもとづく分析の一手手前にとどまり、具体的な対象としてある作品と向き合い、それを構成して

いる表現の特徴や構造に即して考察するレッスンをを行う。作品は私たちの前に、ひとつの物質的なまとまりとして、たとえば書かれた言葉（小説）、描かれた線と記号（マンガ）、化学的・電子的に定着された光学的な像（写真）、俳優の身体と声（演劇）、明滅する映像の連なり（映画）として与えられている。この授業では、そのような物質的まとまりとしての作品がどのように形作られており、どのような動き、出来事がそこに生起しているのかを明らかにし、それを言葉によって記述するレッスンをを行う。また、文献調査、画像編集にもとづく簡潔なプレゼンテーションを作成し、発表を行うレッスンを実施する。

●到達目標

作品から感じたことを手がかりにして作品表現について考察し論理的な文章にまとめる基礎的スキルの習得をめざす。

●授業内容・授業計画

小説、エッセイ、写真、マンガ、演劇、映画について、それぞれの表現形式の基本的特徴を学び、作品分析を執筆する。また学期末には各自、選んだテーマで発表を行う。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 小説分析（1）
- 第3回 小説分析（2）
- 第4回 マンガ分析
- 第5回 演劇分析（1）
- 第6回 演劇分析（2）
- 第7回 ミュージカル分析（1）
- 第8回 ミュージカル分析（2）
- 第9回 写真分析
- 第10回 映画分析（1）
- 第11回 映画分析（2）
- 第12回 発表の方法と技術
- 第13回 口頭発表（1）
- 第14回 口頭発表（2）
- 第15回 まとめ

●評価方法

6回提出するレポートと口頭発表による。

●受講生へのコメント

この授業は表現文化コース2回生を対象とした授業です。表現文化コースの2回生は必ず履修すること。他コースの学生は受講できません。

●参考文献・教材

コピーを配布。

掲載No. 253	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現・表象文化論演習 I Seminar in Culture and Representation I	前木 2	2 単位	2・3 年
	旧科目名 表現文化演習 I	担当教員名 三上 雅子 教授		

●科目の主題

様々な芸術ジャンルや文化現象における「表象されたものとしての恐怖」を考察する。

●到達目標

芸術ジャンルや時代状況・文化圏・言語圏が異なりながら、同一主題を持つ作品群を比較研究する手続きを学ぶ。特定の作品を取り上げて、それに関する文献・先行研究を踏まえて作品分析を行う手法を習得する。

●授業内容・授業計画

「恐怖」は人間における最も原始的な感情の一つである。しかし、人間は自己の内に潜む「恐怖」を、対象化し、昇華し、「虚構としての恐怖」を構築、それらを芸術や娯楽作品の素材とした。今日私たちは、小説・映画・演劇・ゲーム・マンガなど、様々な「表象としての恐怖」に慣れ親しんでいる。そこには、いわゆるホラーだけではなく、ミステリーなども含まれる。本授業では、具体的に作品を取り上げ、「人間は何を怖がるのか」「時代や文化圏における恐怖の対象の違い」「恐怖の物語の普遍的構造」などを扱った理論について講じ、「恐怖」を扱う作品群を比較考察していく。それを踏まえてグループ発表を行ってもらう。

- 第1回 イントロダクションー恐怖の対象

- 第2回 虚構としての恐怖 (1) —恐怖小説①
- 第3回 虚構としての恐怖 (2) —恐怖小説②
- 第4回 虚構としての恐怖 (3) —恐怖映画①
- 第5回 虚構としての恐怖 (4) —恐怖映画②
- 第6回 虚構としての恐怖 (5) —恐怖映画③……都市伝説・現代における恐怖
- 第7回 物語の構造
- 第8回 文化理論から見た恐怖
- 第9回 グループ発表1回目
- 第10回 グループ発表2回目
- 第11回 グループ発表3回目
- 第12回 グループ発表4回目
- 第13回 グループ発表5回目
- 第14回 グループ発表6回目
- 第15回 総括

●評価方法

評価は、学期末のレポート (50%) および授業中の発表 (40%)、さらに授業中の討論への積極的参加 (10%) によって評価する。

●受講生へのコメント

教室の関係上、履修希望者多数の場合には、受講制限を行う。その場合は表現文化コースの学生を優先し、その後抽選をする。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。必要に応じて映像資料も用いる。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
254	表現・表象文化論演習Ⅱ	後水5	2単位	2・3年
	Seminar in Culture and Representation Ⅱ			
	旧科目名 表現文化演習Ⅱ	担当教員名 小田中 章浩 教授／中川 眞 教授／ 海老根 剛 准教授		

●科目の主題

アーツマネジメントとは、芸術と社会をつなぎ、アーティストと一般の人々のあいだの出会いと協働を組織する仕事です。この演習では、講義、ワークショップ、実習を交えて、アーツマネジメントの基礎を学びます。

●到達目標

アーツマネジメントの基礎的な理論を学んだうえで、展覧会や講演会などの企画立案を行い、実際にその企画の実現を通して、アーツマネジメントに現在求められている課題とそれにふさわしい手法を学びます。

●授業内容・授業計画

開講形式が通常の講義や演習とは大幅に異なるので注意すること。最初のガイダンスに続いて、アーツマネジメントに関する導入的な講義を行い、その後はグループに分かれての実習となる。実習における実際の作業は、授業時間外に行われ、授業ではプロジェクトの進捗状況の報告と問題点の討議が行われる。

この授業は後期に開講されるが、前期のうちに説明会を行い、スケジュールとグループ分けを行うので、掲示に注意し、受講希望者はかならずこの説明会に参加するようにしてください。また、授業は一部、不定期に行われることとなりますが、この点についても説明会で説明します。また、最終的な企画の実施は授業期間の終了後 (2月後半や3月など) になることも考えられます。受講者はその点を了解の上で受講してください。

以下に15回の授業計画を掲げるが、これはあくまでも仮のものであり、実際には複数の作業が同時進行することになるので、その点に留意するように。

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 講義アーツマネジメントとは何か (1)
- 第3回 講義アーツマネジメントとは何か (2)
- 第4回 企画立案 (1)
- 第5回 企画立案 (2)
- 第6回 予算と実施体制の決定
- 第7回 実施時期と会場の決定
- 第8回 ゲストとの交渉
- 第9回 中間総括

- 第10回 広報 (1) ウェブサイト、フライヤー作成
- 第11回 広報 (2) メディアへの周知
- 第12回 実施要領の詳細と役割分担の決定
- 第13回 作品の搬入と管理
- 第14回 企画実施
- 第15回 まとめ

●**評価方法**

展覧会などのプロジェクトを企画立案・実施するワーキンググループへの参加度および最終的なプロジェクトの成果にもとづいて成績評価を行う。

●**受講生へのコメント**

この授業は、通常の「座学」の授業とは正反対のコンセプトにもとづいて実施されます。他人から教えてもらうのを受動的に待つのではなく、みずから動くことを通して学習する能動的な態度が、受講生には要求されます。企画を実際に実現するための作業の大半は、授業時間外に行われます。型破りな授業ですので、ラクではありませんが、アーツマネジメント（広くは文化を社会に届ける仕事）に関心のある学生には、やりがいのある授業になるはずです。やる気のある学生の積極的な参加を期待します。

●**参考文献・教材**

適宜紹介する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
255	表現・表象文化論演習Ⅲ	前火 4	2 単位	3・4 年
	Seminar in Culture and Representation Ⅲ			
	旧科目名 表現文化演習Ⅲ	担当教員名 高島 葉子 准教授		

●**科目の主題**

視覚メディア、視覚芸術としての絵本の分析、研究方法を主題とする。

●**到達目標**

絵本の表現技法についての基本的知識と、絵本の分析・研究方法の基礎を習得したうえで、具体的な作品分析を行い、それを小論文として論理的に展開できるようになることを目標とする。

●**授業内容・授業計画**

まず、絵本研究の入門書を教材として、絵の構成、色彩、視点、語り手、絵と言葉の関係など、絵本の表現技法について学び、後半は絵本に関する論文を取り上げて、担当者が要約、報告した後、全員で討論し理解を深める。最後に各自が題材として選んだ絵本について、分析、発表を行い、学期末に小論文にまとめる。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 入門的文献の講読 (1)
- 第3回 入門的文献の講読 (2)
- 第4回 入門的文献の講読 (3)
- 第5回 入門的文献の講読 (4)
- 第6回 入門的文献の講読 (5)
- 第7回 作品論の報告と討論 (1)
- 第8回 作品論の報告と討論 (2)
- 第9回 作品論の報告と討論 (3)
- 第10回 作品論の報告と討論 (4)
- 第11回 作品論の報告と討論 (5)
- 第12回 受講生の分析発表 (1)
- 第13回 受講生の分析発表 (2)
- 第14回 受講生の分析発表 (3)
- 第15回 小論文の書き方説明

●**評価方法**

平常点 50%、期末レポート 50%で評価する。

●**受講生へのコメント**

受講生は、毎回の授業に参加して必要な報告を行うだけでなく、他の発表について積極的に意見を述べるのが求められる。原則的に受講は表現文化コースの学生に限り、定員を 20 名とする。

●**参考文献・教材**

藤本朝巳『絵本はいかに描かれるか』

上記以外に、授業中にプリントを配布する。また必要に応じて参考資料、文献を紹介する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
256	表現・表象文化論演習Ⅳ Seminar in Culture and Representation Ⅳ	後金 2	2 単位	3・4 年
	旧科目名 表現文化演習Ⅳ	担当教員名 石川 優 非常勤講師		

●科目の主題

「やおい / ボーイズラブ」文化論

●到達目標

- (1) 現代の文化事象を論理的に考察するための視点と手法を学ぶ。
- (2) 表現文化を研究する上で必要となる専門的な知識と語彙を習得する。

●授業内容・授業計画

この授業では、「やおい / ボーイズラブ (BL)」を対象とし、現代的な文化事象を研究するためのアプローチについて考える。「やおい / BL」とは、一般に「女性を主な担い手とした、男性同士の関係性を主題とする創作」を意味する。1970 年代以降、女性たちの「草の根」の文化実践をつうじて形成された「やおい / BL」は、創作手法 (オリジナル、二次創作)、流通 (商業、非商業)、メディア (小説、マンガ、アニメ、ゲームなど)、言語圏を横断しながら、巨大な「ジャンル」を形成している。このように多様な広がりをもつ文化を研究する上で、どのような視点、手法、枠組があり得るのかを受講生とともに検討する。

まず、「やおい / BL」に関する概説を講義形式でおこなう。次に、受講生に配布テキストを中心にグループ発表してもらい、全員でディスカッションをおこなう。テキストは「やおい / BL」研究をはじめとし、マンガ研究、ファン文化研究、ポピュラー文化研究などについての論考を複数配布する予定である。なお、以下の授業計画は暫定的なものであり、受講生の人数や授業の進行に合わせて変更する場合がある。

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 「やおい / BL」概論 (1) 定義
- 第 3 回 「やおい / BL」概論 (2) 理論
- 第 4 回 「やおい / BL」概論 (3) 作品分析
- 第 5 回 発表および討論 (1)
- 第 6 回 発表および討論 (2)
- 第 7 回 発表および討論 (3)
- 第 8 回 発表および討論 (4)
- 第 9 回 中間総括
- 第 10 回 発表および討論 (5)
- 第 11 回 発表および討論 (6)
- 第 12 回 発表および討論 (7)
- 第 13 回 発表および討論 (8)
- 第 14 回 発表および討論 (9)
- 第 15 回 全体総括

●評価方法

出席 (10%)、授業での発表 (40%)、学期末レポート (50%) によって評価する。

●受講生へのコメント

「やおい / BL」だけでなく、マンガ、アニメ、ゲーム、TVドラマなどの文化製品、およびそれに関連する文化実践 (同人誌や MAD 制作など) に関心のある学生の受講を歓迎する。受講生による発表とディスカッションが中心となるため、授業への積極的な参加が求められる。初回にて授業スケジュールの説明と文献リストの配布をおこなうので、必ず出席すること。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
257	比較表現論演習	前月5	2単位	3・4年
	Seminar in Comparative Representation			
	旧科目名 表現文化演習 V	担当教員名 海老根 剛 准教授		

●科目の主題

この授業では、毎回、一本の映画作品から特定の場面を選び出し、その場面がどのような仕方で構成されているのかを具体的に考察します。授業は映画作品の上映、指定された場面の考察、および文献の講読から構成されます。受講者には、関連する二次文献も参考にしながら、いくつかの基礎概念を用いて映画作品の一場面を詳細に考察してもらいます。

●到達目標

映像、音響、ショット、モンタージュ、演出などの観点から、多様な映画作品を柔軟に分析する方法を学ぶこと。映像と音響の具体的な分析に基づいて映画作品を考察する基礎的なスキルを身につけること。

●授業内容・授業計画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 映画分析の基礎概念
- 第3回 映画論の講読 (1)
- 第4回 映画論の講読 (2)
- 第5回 映画上映 (1)
- 第6回 場面分析 (1)
- 第7回 映画上映 (2)
- 第8回 場面分析 (2)
- 第9回 映画上映 (3)
- 第10回 場面分析 (3)
- 第11回 アニメーション映画論の講読 (1)
- 第12回 アニメーション映画論の講読 (2)
- 第13回 映画上映 (4)
- 第14回 場面分析 (4)
- 第15回 まとめ

●評価方法

単位取得の条件は、発表を担当することです。作品分析の発表者には事前に作品のDVD および関連二次文献を配布します。発表者はこれらの資料にもとづいて指定された場面の分析を行います。期末レポートを課さないため、入念な準備をして発表することが求められます。

●受講生へのコメント

この授業は、2013年度後期集中科目「表象文化論」の実践編でもあります。昨年度「表象文化論」を受講した者は、すでに映画分析の基礎的なレッスンができていますので、積極的に受講してください。また、昨年度の「表象文化論」を受講していない受講者のために、最初の方で基礎概念の解説を行います。映画を思考することに関心のある意欲的な学生の受講を歓迎します。

日本映画／外国映画、実写映画／アニメーション映画の区別なく、多様な作品を取り上げる予定です。

映画上映の際には、作品全体を上映します。したがって、作品の長さによっては、授業時間を若干オーバーすることがあります。その点を承知の上で受講してください。

●参考文献・教材

適宜、コピーを配布する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
258	文化理論特別演習 a	後火2	2単位	3・4年
	Advanced Seminar in Culture Theory a			
	旧科目名 表現文化演習 VI a	担当教員名 小田中 章浩 教授		

●科目の主題

卒業論文作成に必要とされる能力の開発

●到達目標

本講は表現文化学コースに所属する三回生（四回生）を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導する。したがって表現文化学コースに所属する三回生（四回生）は、この演習を必ず受講することが求められる。

●授業内容・授業計画

受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに800字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法やリサーチの方法について教える。最後に卒業論文のシミュレーションとして、4000字程度の小論文を作成する。

- 第1回 文章を要約する：「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
- 第2回 文章を要約する：『民族という名の宗教』の要約法について考える
- 第3回 文章を要約する：『動物化するポストモダン』の要約法について考える
- 第4回 引用の方法：論文執筆における引用の方法について解説する
- 第5回 文章を要約する：『「七人の侍」と現代』の要約法について考える
- 第6回 分析の方法：三つのテキストのキーワードを用いて自分に関心のある対象を分析してみる
- 第7回 分析のアウトラインを作る：800字の小論文のためのアウトライン作成
- 第8回 小論文の作成：800字の小論文を完成させる
- 第9回 絵画の分析：課題として与えられた絵画を分析するための800字の小論文のアウトライン作成
- 第10回 絵画の分析：アウトラインに基づいて絵画を分析した800字の小論文を完成させる
- 第11回 課題として与えられた小説、映画、マンガについて4000字の小論文を書くためのリサーチを行う
- 第12回 課題として与えられた小説、映画、マンガについて4000字の小論文を書くためのリサーチを行う
- 第13回 リサーチに基づいて4000字の小論文のアウトラインを作成する
- 第14回 アウトラインに基づいて4000字の小論文の作成に取りかかる
- 第15回 4000字の小論文を完成させる

●評価方法

受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み（70%）と、講義終了後に提出する小論文（30%）によって行う。

●受講生へのコメント

このaクラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて最初の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情によりaクラスを受講できない者については、bクラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●参考文献・教材

- なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書（新赤版）204,1992年
 - 東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001年
 - 四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書（新赤版）1255,2010年
- さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
259	文化理論特別演習 b	後火 5	2 単位	3・4 年
	Advanced Seminar in Culture Theory b			
	旧科目名	担当教員名		
	表現文化演習 VI b	小田中 章浩 教授		

●科目の主題

卒業論文作成に必要とされる能力の開発

●到達目標

本講は表現文化学コースに所属する三回生（四回生）を対象とし、表現文化学コースにおいて卒業論文を書くための研究テーマ設定の方法、問題の論理的な構築ならびに分析の方法について指導し、さらにそれらのプレゼンテーション能力を高めることを目的とする。したがって表現文化学コースに所属する三回生（四回生）は、この演習を必ず受講することが求められる。

●授業内容・授業計画

受講者がこれまでに大学で学んできた論理的な文章表現力を確認するために、まず文章の要約、小論文作成のためのアウトラインの作成、さらに800字の小論文の作成へと段階的に課題を与える。その過程において表現文化学に関係した文献を読み、また文献の引用の方法やリサーチの方法について教える。最後に卒業論文のシミュレーションとして、4000字程度の小論文を作成する。

- 第1回 文章を要約する：「使用後を考えなかった兵器」を元に要約の具体的方法を解説
- 第2回 文章を要約する：『民族という名の宗教』の要約法について考える
- 第3回 文章を要約する：『動物化するポストモダン』の要約法について考える
- 第4回 引用の方法：論文執筆における引用の方法について解説する
- 第5回 文章を要約する：『「七人の侍」と現代』の要約法について考える
- 第6回 分析の方法：三つのテキストのキーワードを用いて自分に関心のある対象を分析してみる
- 第7回 分析のアウトラインを作る：800字の小論文のためのアウトライン作成
- 第8回 小論文の作成：800字の小論文を完成させる
- 第9回 絵画の分析：課題として与えられた絵画を分析するための800字の小論文のアウトライン作成
- 第10回 絵画の分析：アウトラインに基づいて絵画を分析した800字の小論文を完成させる
- 第11回 課題として与えられた小説、映画、マンガについて4000字の小論文を書くためのリサーチを行う
- 第12回 課題として与えられた小説、映画、マンガについて4000字の小論文を書くためのリサーチを行う
- 第13回 リサーチに基づいて4000字の小論文のアウトラインを作成する
- 第14回 アウトラインに基づいて4000字の小論文の作成に取りかかる
- 第15回 4000字の小論文を完成させる

●**評価方法**

受講生はほぼ毎回課題の提出が求められる。評価は、各自の毎回の課題への取り組み（70%）と、講義終了後に提出する小論文（30%）によって行う

●**受講生へのコメント**

このbクラスは、表現文化学コース所属の三回生のうち、学生番号で数えて後半の半数が受講することを想定している。ただしやむを得ない事情によりbクラスを受講できない者については、aクラスへの移動を認めるので、最初の授業の際に教員に相談すること。

●**参考文献・教材**

- なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書（新赤版）204,1992
- 東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書 1575,2001
- 四方田犬彦『「七人の侍」と現代』岩波新書（新赤版）1255,2010
- さらに黒沢明監督『七人の侍』をまだ見ていない人は、この副読本が用いられる時までに見ておくこと。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
260	表現文化論特論 Specific Lecture in Art and Representation	後水3	2単位	3・4年
	旧科目名 表現文化特論 I	担当教員名 増田 聡 准教授		

●**科目の主題**

映画や絵画のように距離をもって鑑賞される「芸術」というより、衣服のごとく身にまとう「もの」へと接近しつつある21世紀初頭のポピュラー音楽環境を、複製技術、主体性の変容、盗作と著作権意識等の観点から検討する。

●**到達目標**

音楽文化研究への学術的アプローチに必要な「音楽の捉え方」を獲得することを目標とする。

●**授業内容・授業計画**

講義形式。授業計画は仮のものであり、履修者の背景や知見に応じて適宜変更する。また視聴覚資料を多用する。

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 ウォークマンと聴衆の欲望
- 第3回 ブランドとしてのアーティスト
- 第4回 音楽的主体の複数性
- 第5回 演奏リアリズム概念とその相対化の動向
- 第6回 Perfumeと初音ミクの相違
- 第7回 ビデオクリップ史 (1)
- 第8回 ビデオクリップ史 (2)
- 第9回 ビデオクリップ史 (3)
- 第10回 バクリと盗作
- 第11回 copyrightと著作権
- 第12回 複製と再生産
- 第13回 ディスク文化の諸相

第14回 芸術と物

第15回 まとめ

●評価方法

期末レポートによる評価。

●受講生へのコメント

楽典の知識は必要としないが、現代文化や文化理論について広く関心を持つ学生の履修を期待する。

●参考文献・教材

参考文献として下記をあげておく。音楽分野について卒論執筆を考えている受講生は一読しておくこと。

増田聡『その音楽の〈作者〉とは誰かーリミックス・産業・著作権』（みすず書房）

増田聡『聴衆をつくるー音楽批評の解体文法』（青土社）

増田聡・谷口文和『音楽未来形ーデジタル時代の音楽文化のゆくえ』（洋泉社）

円堂都司昭『ソーシャル化する音楽ー「聴取」から「遊び」へ』（青土社）

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
261	表象文化論特論	前集中	2単位	3・4年
	旧科目名	担当教員名 橋本 一径 非常勤講師		

●科目の主題

痕跡論——イメージ、歴史、記憶、身体

●到達目標

ディディ＝ユベルマンの「痕跡」概念を理解し、イメージをめぐる現代の諸現象に対し、自分なりの解釈を与えられるようになる。

●授業内容・授業計画

デジタル写真が全盛となった現代においては、たとえば報道写真の修正が発覚してスキャンダルになるなど、イメージへの信頼は揺らぎつつあるようにも見える。その一方で誰もが携帯で写真や動画を手軽に撮影し、あらゆる場所に監視カメラが張り巡らされた現代は、かつてないほどイメージが氾濫する時代でもある。本講義は、イメージをめぐる混迷の度合いを深める現代を理解するための、歴史的・思想的な視座を得る試みである。フランスの美術史家・哲学者であるジョルジュ・ディディ＝ユベルマンの提唱する「痕跡」の概念を、さしあたりの手がかりとしつつ、イメージと歴史や記憶、身体の間を問い直しながら、人類にとってのイメージの意味を問いなおすことを目指す。

第1回 ディディ＝ユベルマンと「痕跡」のイメージ (1)

第2回 ディディ＝ユベルマンと「痕跡」のイメージ (2)

第3回 ディディ＝ユベルマンと「痕跡」のイメージ (3)

第4回 写真論の展開——「インデックス」を越えて (1)

第5回 写真論の展開——「インデックス」を越えて (2)

第6回 写真の歴史 (1) ——写真と様々な「顔」

第7回 写真の歴史 (2) ——写真と科学

第8回 写真の歴史 (3) ——心霊写真はなぜ怖いのか？

第9回 デジタル時代の写真論 (1) ——写真と集成

第10回 デジタル時代の写真論 (2) ——報道と写真

第11回 デジタル時代の写真論 (3) ——写真と定点観測

第12回 デジタル時代の写真論 (4) ——イメージの権利

第13回 イメージの人類学——写真信仰からの脱却を目指して

第14回 モンタージュの思想——アーカイブからアトラスへ

第15回 まとめ

●評価方法

レポートと平常点による。

●受講生へのコメント

本講義は集中講義の形式で行われます。上に記した各回の授業内容は、全体の流れの見取り図のようなものだとお考えください。

●参考文献・教材

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお』、橋本一径訳、平凡社、2006年

橋本一径『指紋論』、青土社、2010年

その他は授業中に指示する。

掲載No. 262	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	比較表現論特論 Specific Lecture in Comparative Representation	後月 4	2 単位	1～4 年
	旧科目名 ロシア文化論	担当教員名 浅岡 宣彦 特任教授		

●科目の主題

主題：文学と文学を素材とする他の芸術ジャンルとの比較を通して作品の鑑賞力を養う。

●到達目標

目標：豊饒なロシア文化の精華を鑑賞しつつ、芸術文化の多様な表現方法を理解してもらう。

●授業内容・授業計画

授業内容：主に19世紀のロシア文学とそれを素材に用いた他の芸術ジャンル（音楽、美術、演劇、映画等）の作品を取り上げ、表現方法や解釈の相違などを比較検討する。それと同時に、いくつかの重要な事項：魔法昔話の構造（プロップ）、愚者像（バフチンほか）、女性像（ロートマンほか）、逆遠近法（ウスペンスキイ）、異化（シクロフスキイ）、モンタージュ（エイゼンシュテイン）などを作品に即して取り上げる。

- 第1回 文学と音楽（1）
- 第2回 文学と音楽（2）
- 第3回 文学と音楽（3）
- 第4回 文学と音楽（4）
- 第5回 文学と音楽（5）
- 第6回 ロシア・バレエ
- 第7回 ロシアの宗教
- 第8回 ロシアのイコン
- 第9回 文学と美術
- 第10回 文学と演劇（1）
- 第11回 文学と演劇（2）
- 第12回 文学と映画（1）
- 第13回 文学と映画（2）
- 第14回 文学と映画（3）
- 第15回 全体のまとめ

●評価方法

具体的に作品を複数読んでもらい、いくつかのテーマに沿ってレポートおよびテストで論じてもらう。出席とコミュニケーション・カード（10%）の記述を考慮し、レポート（30%）とテスト（60%）で評価をする。

●受講生へのコメント

主として、ロシア文学の代表的作品とそれを素材にした様々な芸術作品を取り上げるので、必ず複数の作品を読み、鑑賞すること。

●参考文献・教材

教材は使用しない。適宜、プリントを配布する。

参考文献：藤沼貴、小野理子、安岡治子共著『ロシア文学案内』岩波文庫。

ボリス・ウスペンスキイ著『構成の詩学』（川崎淡・大石雅彦訳）法政大学出版局。

ロートマン著『ロシア貴族』（桑野隆ほか訳）筑摩書房。

そのほかの文献は適宜、授業中に指示する。

掲載No. 263	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
	表現文化講読 I Readings in Art and Representation I	後月 3	2 単位	2～4 年
	旧科目名	担当教員名 野末 紀之 教授		

●科目の主題

20 世紀アメリカの小説家イーディス・ウォートン（Edith Wharton）の幽霊物語の傑作「夜の勝利」（“The Triumph of Night”, 1910）を精読する。

●到達目標

精緻な言語で書かれた文学作品をじっくり読み解く面白さを味わうとともに、それを分析へとつなげる方法のヒント

を得るのが目標である。

●授業内容・授業計画

テキストを演習形式で読みすすめる。質問をふくめ、積極的な発言が求められる。

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 テキスト1～3 ページ
- 第3回 テキスト4～6 ページ
- 第4回 テキスト7～9 ページ
- 第5回 テキスト10～11 ページ
- 第6回 テキスト12～14 ページ
- 第7回 テキスト15～17 ページ
- 第8回 テキスト18～20 ページ
- 第9回 テキスト21～23 ページ
- 第10回 テキスト24～25 ページ
- 第11回 テキストにかんする質疑応答
- 第12回 関連資料と論文の読解
- 第13回 関連資料と論文の読解 (続)
- 第14回 関連資料と論文の読解 (続々)
- 第15回 総括

●評価方法

出席、発表、試験を総合的に判断する。

●受講生へのコメント

辞書を徹底的に引いて、英文を読み込むこと。

●参考文献・教材

テキストはプリントを配布する。参考文献は授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
264	表現文化講読Ⅱ	後木3	2単位	2～4年
	Reading In Art and Representation Ⅱ			
	旧科目名	担当教員名		
	表現文化講読Ⅱ a	海老根 剛 准教授		

●科目の主題

映画理論の古典的著作であるベラ・バラージュの『視覚的人間 映画のドラマツルギー』を講読します。この書物でバラージュは、19世紀末に誕生し、20世紀に開花した新たな芸術表現としての映画の独自性と可能性を考察しています。バラージュはサイレント映画が芸術表現にもたらした革新を指摘するとともに、様々なトピックについて、今日の私たちにとっても示唆に富む考察を行っています。映画理論の古典を出発点にして、今日の私たちの映像体験について考えてみたいと思います。

●到達目標

『視覚的人間』を丁寧に読み解くとともに、代表的なサイレント映画作品の鑑賞を通して、バラージュの考察を具体的に理解することを目指します。また、バラージュの考察の現代的意義についても議論します。

●授業内容・授業計画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 「序言 三つの口上」
- 第3回 「視覚的人間」
- 第4回 映画上映 (1)
- 第5回 「映画の実体」
- 第6回 「類型と相貌」
- 第7回 映画上映 (2)
- 第8回 「表情の動き」
- 第9回 「クローズアップ」
- 第10回 「事物の顔」
- 第11回 映画上映 (3)
- 第12回 「自然と自然らしさ」
- 第13回 「映像構成」

第14回 「断片的補遺」「世界観」

第15回 まとめ

●評価方法

発表とレポートで評価する。

●受講生へのコメント

サイレント映画は単なる音のない（不完全な）「トーキー映画」ではありませんでした。それはトーキー映画とは異なる独自の映像表現を持っていたのです。この授業はそうしたサイレント映画の魅力を再発見する機会になると思います。またバラージュのテキストは、今日の私たちにもアクチュアルな考察を提供してくれます。この授業を私たちの映像体験を考察する端緒にしてもらえるといいと思います。

●参考文献・教材

ベラ・バラージュ著『視覚的人間 映画のドラマツルギー』（岩波文庫 青 557-1）を教科書として用いる。

希望者にはドイツ語原文（“Der sichtbare Mensch”）も配布する。

掲載No.	授業科目名	開講期	単位数	標準履修年次
265	表現文化講読Ⅲ	前水2	2単位	2～4年
	Reading In Art and Representation Ⅲ			
	旧科目名	担当教員名		
	表現文化講読Ⅱ b	小田中 章浩 教授		

●科目の主題

本講は、初級レベルのフランス語を学んだ学生を対象として、表現文化に関連したフランス語の教材を用いることによって、中級フランス語の読解力を習得してもらうことを目的とする。

●到達目標

上記のように、中級フランス語の読解力を習得してもらうことを目標とする。

●授業内容・授業計画

教材は前年度に引き続き、Riyoko Ikeda *La Rose de Versailles*（池田理代子『ベルサイユのばら』）を読む。ただし受講者の希望により、他のマンガ、あるいは映画、ファッション等の雑誌の記事など、中級レベルのフランス語の習得に役立つ他の表現文化関連の題材を扱うこともある。

- 第1回 仏語テキスト購読 1回目
- 第2回 仏語テキスト購読 2回目
- 第3回 仏語テキスト購読 3回目
- 第4回 仏語テキスト購読 4回目
- 第5回 仏語テキスト購読 5回目
- 第6回 仏語テキスト購読 6回目
- 第7回 仏語テキスト購読 7回目
- 第8回 仏語テキスト購読 8回目
- 第9回 仏語テキスト購読 9回目
- 第10回 仏語テキスト購読 10回目
- 第11回 仏語テキスト購読 11回目
- 第12回 仏語テキスト購読 12回目
- 第13回 仏語テキスト購読 13回目
- 第14回 仏語テキスト購読 14回目
- 第15回 仏語テキスト購読 15回目

●評価方法

評価は平常点（50%）と期末試験（50%）によって行う。

●受講生へのコメント

受講生は初級レベルのフランス語力を身につけていることが求められる。

●参考文献・教材

授業において随時プリントとして配布する。